

北九州市立  
文学館

# 友の会会報

第16号

2023年1月

- 2面 文学館企画展に寄せて
- 3面 会員寄稿
- 4面 友の会会員・役員名簿

新年にあたり編集委員会は、若手作家で水墨画家の砥上裕将（とがみひろまさ）さん（写真）に注目しました。砥上さんは1984年、福岡県生まれ。水墨画を描くため、友人に会うためなど、北九州市を訪れる機会も多く、市立文学館の2階に設置された学芸員が紹介するトピックパネル「ゆかりの作家・作品の映画化2022年」でも紹介されています。水墨画を題材にしたデビュー作の青春小説『線は、僕を描く』は2019年の第59回メフィスト賞やブランチBOOK大賞2019を受賞し、2020年の本屋大賞第3位に選出。漫画化・映画化もされ話題を呼びました。砥上さんへのインタビューを聞き語りの形でお伝えします。

## 水墨画の世界 青春小説に

### 砥上裕将さんに聞く



◀ 千草ホテルが所蔵する砥上さんが描いた枝垂れ桜。近く同ホテルの月の間に飾られる予定

「線は、僕を描く」は、水墨画に挑む若者の物語です。この小説を書いた段階では、日本の水墨画は滅びるだろうと思っていました。大御所の先生が次々と

亡くなり、みんな年賀状も出さなくなつて毛筆文化から離れていく。水墨画は高年齢者の趣味でしかなく、何の魅力があるのか若い人は分からないですよね。

自分が水墨画を始めたのは20歳くらいからです。子どもの頃から書道教室に通っていて、水墨画もできそうだと勝手に思ったんです。でもすごく難しく、できませんでした。例えば葉っぱ1本を描こうとしても、線を1本引いただけでは絶対葉っぱにならない。そこに流れる風や空気感などの情景が思い浮かばなくてはいけません。それを一筆で、しかも一瞬でやるのは難しい。自然に見せるためにはひたすら訓練するしかない。そんな世界です。

でも、自分はやっぱり水墨画が好きですし、残ってほしい。水墨画について書いた小説が映画にもなり、若い人に知ってもらおうお手伝いができたことは心からうれしいです。

小説は30歳を過ぎてから書き始めました。今は小説がメインですが、水墨画を描かないと駄目になるという気持ちがあるので、何とか時間を作り、なるべく筆を持つようにしています。

昨年、八幡東区西本町の千草ホテルで水墨画作品展を開きました。あの時は絵を描きたいという強烈な気持ちに駆られていました。それまで貧乏画家で一生懸命やってきましたが、作家としてデビューしてようやく制作費が作れるようになり、贅沢をしたいという気持ちがあつて大きな桜の絵を出品しました。八幡東区祇園原町の龍潜寺にある見事な枝垂れ桜がモデルです。水墨画のモデルに

2面に続く

稿 寄  
鮮烈さと懐かしさと  
「祈り・藤原新也」展に寄せて

39年前に「メント・モリ 死を想え」を入手以来、藤原新也のカメラが捉えたものに惹かれてきた私にとって、今回の企画展「祈り・藤原新也」はうれしかった。心に響いていることを記してみた。

彼の原風景はそこで生まれ16歳まで過した故郷・門司港である。人々が密接に接触し合って暮らしていた日常の風景。そして父親の最後の瞬間。シャッターを切ると笑みを浮かべたという。その時代、家族の死はこんなにも穏やかだったのだ。

1969年にインドへ旅立った彼が出会ったのは生と死の等身大の姿だった。ガンジス川とともに生きる人々。一方、「ニンゲン」は犬に食われるほど自由だのシヨットは衝撃的であるが、人間も自然界の一部であるという当たり前のことを私に気づかせてくれた。さらに死期を悟ったインドの僧が聖地に辿り着き、事切れた一瞬。圧巻であった。死が彼を捉えたのではなく彼が死を捉えたのだ、と藤原は講演会で語った。

人が生き、やがて死へ向かう姿を追い続けてきた彼は、死を想うことは生きることへの想いだという。世界を旅し帰国した藤原は東北被災地、コロナで人が消えた街、そして若者たちにシャッターを押す。カメラでありのままを撮り続けた、どんな状況にあつても輝いているいのちを追い続けてきた、と回顧する。

彼の50年間の記録のキーワードは「祈り」であった。同世代の者として、藤原新也の写真は鮮烈で、どこか懐かしい。

(三村保子)



観覧会の想いを語る藤原新也さん  
(2022年9月10日講演会)

稿 寄  
鍛冶町旧居でのエピソード  
「鷗外の小倉時代展」に寄せて

森鷗外の生誕160年などを記念して昨年11、12月に文学館が開いた「鷗外の小倉時代」展を見た。鷗外が住んだ小倉北区鍛冶町の旧居に、家主の宇佐美マサさんを訪ねた時のことを思い出した。

昭和四十四、五年頃であったと思う。宇佐美邸は煉瓦塀で囲われていた上に、マサさんは人が入ってくることを余り好まず、訪問しづらい雰囲気であった。しかし、鷗外の素顔が知りたくて意を決して訪ねたところ、快く対応してくれた。

玄關から縁側を通って座敷に通され、待っていると、彼女は小型犬を抱いて現れた。鷗外が住んだ頃、彼女は子供であったが、当時の記憶はしっかりしていた。私の叔母とマサさんが女学校時代の友人であったことがわかった途端、彼女のほうから進んで話してくれるようになった。叔母と過ごした女学校時代の話までしてくれた。

明治期、宇佐美家は赴任者のために下宿の建物を建てるように役所から言われて母屋の横に赴任者用の家を建てていたが、鷗外は母屋が気に入って、そこに住みたいと言ったために家主が下宿の建物に移り住んだという。鷗外は奥座敷の床の間を背に端然と座していたという。いかめしい顔なのでマサさんは近寄りたたく感じだが、珍しさに駆られて度々、縁側から覗きに行くと笑顔で手招きをされ、その度に逃げ帰ったという。

子供に優しい鷗外の性格の一端を表している。裏の庭は奥行きが広く、馬小屋と井戸があつて、鷗外は毎朝、井戸で冷水摩擦をしてから馬で出勤していた。変わったことをする人だな、と思っていたとマサさんは語った。直接、鷗外と接した人ならではのエピソードである。

(近藤晋平)



森鷗外旧居 (小倉北区鍛冶町)

1面から続く

したいと思わせてくれるようなものが地元であり、しかもその絵は千草ホテルで時季限定ですが見ることができ。北九州はそうした文化を発信できる街ですし、水墨画とは無縁ではないと感じていただければうれしいですね。

2. 作目は2021年に出した『7・5グラムの奇跡』。目の健康を守る視能訓練士の物語です。妹が視能訓練士をしていて、飲み仲間と眼科の先生もいて、書く状況が揃っていました。小説を書く10年以上前には、視能訓練士の話を書いて面白いなと思っていました。でも誰も書きません。仕事の愚痴のような些細なエピソードを「へー、えっ？」といった感じでごまかえて感動的なラインにのせることが難しいから、みんな書かなかつたのかと思います。新人だから分らず挑戦できたのでしようね。

小学校の頃に夏目漱石の『坊っちゃん』を読み、明るく朗らかな小説が好きになりました。同じく漱石の『こころ』には、人間の心をこういふふうによくジャンルもあるのかと衝撃を受けました。セルバンテス『ドン・キホーテ』では、他の人からしたらどうでもいいことに向かつて必死な主人公にシンパシーを感じ、チャールズ・ブコウスキーのどこか悲しみと優しさともユーモアを感じさせるような文体、本当のことを語っている力強さにも惹かれました。

ちっちゃいことで人が気付かないこと、でもすごく大切なことっていっぱいありますよね。そういうものがあつと、どれくらい残っているのか分かりませんが、それを拾い上げて世の中に発信できれば、他の人にとってはどうでもいいことが、自分にはとても面白い。そんな温度差を感じて生きてきました。自分が面白いと感じるものを書いて、ちっちゃく生きていけたら幸せです。

(文責・植田詩生)

会員寄稿

童謡について

永田喜久男

「もういくつ寝るとお正月」―この歌をよく歌った。退職後、「アンクルボイス」という合唱団にいたころだ。年末に、この童謡をうたうと、心の奥深くにしまい込まれていた幼い日々が、ふわっと湧きあがってきた。日本人にとって、童謡は、心の歌であり、大人になっても、歌うのは、幸せなことだ。

しかし、ここで立ち止まって考えてみたい。本来童謡は、子どもの成長を触発させるため、詩と音楽で表現されたものである。

会員寄稿

葦平と哲さんに会える場所

野口敬太郎

パキスタンとアフガニスタンで人道支援活動に尽くした故・中村哲医師のコーナーが、若松区白山の火野葦平旧居「河伯洞」に新設されました。2021年のリニューアルに伴うものです。哲さんは葦平の甥なので、いわばミニ記念館です。哲さんの活動を支援する国際NGO「ベシワール会」から寄贈された書籍や映像資料を見ることが出来ます。

例えば「劇場版 荒野に希望の灯をともし」は昨年12月に、小倉昭和館の主催で北九州市立大学内の北方シネマで上映されましたが、上映時間が2分短いだけの同名のDVDも大画面で視聴できます。児童向けの書籍資料も充実しています。葦平原作の映画では「土と兵隊」などの貴重な映像もあります。玄関入口にはスタッフの手作りによるポスターが張られていて、哲さんの笑顔が迎えてくれます。

また福岡市西区の九州大学附属図書館「中央図書館」内では、哲さんの言葉や活動を伝えるメモリアルアーカ

でも今、童謡は子どもたちの心に届いているのだろうか。心配である。「ぞうさん」や「さつちゃん」など、よく知られているものは、ともかく、多くのすぐれた童謡が子どもたちの心に触れずに、時代の波に押し流されているとしたら、残念なことである。

今、童謡は、新しい模作の時代といわれていて、新しい詩人たちが懸命に努力を重ねている。そこで、私たち大人にも何かできるのではないかと思うのである。

例えば今、創作されている童謡について理解を深め、子どもと一緒に歌い、子どもたちの心に童謡を近づけるようにするなど、それができれば、すばらしいことだと思う。日本人の心の歌、童謡が、子どもものになりますように、切に願っている。



イブの常設展示スペースが2021年3月にオープンしました。リーフレットは河伯洞にも掲示しています。哲さんがアフガニスタンでの用水路建設の手にした「山田堰」がある朝倉市山田でも同年2月、筑後川と山田堰を望む広場に、朝倉ライオンズクラブが記念碑を建立しました。哲さんの肖像と「照一隅」と刻まれた石碑に、哲さんがここで詠んだ句が彫られています。

「濁流に沃野夢見る河童かな」  
文人の血筋とはいえ、俳句も残していたとは！ 河童を好んだ、葦平おじさんを思い出したのか。

映画と文学

再建後も文学館と共に

小倉昭和館主 樋口 智司

前号の会報でもご紹介いただいた通り、小倉昭和館はこれまで、北九州市立文学館の企画展に合わせて様々な特集上映を行って参りました。しかし昨年8月10日の巨過地区火災により、創業83年の記念日を前に残念ながら焼失してしまいました。この間、文学館友の会の皆様に頂戴したご支援、ご厚情に改めて心よりお礼申し上げます。2020年には北九州市主催の「東アジア文化都市北九州」の文化事業の一環「アートシネマ」は当館でも行われ、北九州ゆかりの作家の原作映画を特集上映し、ゲストをお招きしてのトークイベントも実施しました。

「アートシネマ」では35ミリフィルムでの上映作品も多く、観る機会の少ない名作をご覧いただくことは大きな喜びでした。昨春秋には市立文学館と市立美術館分館で開かれた写真家、藤原新也さんの作品展に合わせて、藤原さんと親交があった作家、瀬戸内寂聴さんを描いたドキュメンタリー映画を上映する予定でしたが、かなわず残念でした。

今、小倉昭和館は多くの方々の励ましのお声に力を感じ、再建を目指して歩んでおります。昨年11月からは、会場をお借りしての「小倉昭和館PRESENTS 特別上映」を月1度開き、ご好評をいただいています。これからも「映画の街・北九州」「文学の街・北九州」



2022年11月27日、リーガロイヤルホテル小倉で開かれた被災後の特別上映会に観客がいらした様子

にある街の小さな映画館として、皆様が一番身近な映画館として、居心地のよい集いの場としての再建を目指し、市立文学館と共に歩んで参りたいと思っております。友の会の皆様のご支援ご協力を心よりお願い申し上げます。(文学館友の会理事)